
夢路の果てで

白桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢路の果てで

【Nコード】

N5294BA

【作者名】

白桃

【あらすじ】

——美しい夢を見た。

夢

……美しい夢を見た。何が美しいのかと問われると、全てのものが美しかったと答える他ない。

建造物や出てくる女性、視覚で判断することの出来ない匂いまで美しいと思ってしまった。

夢だと分かった瞬間、ふと頬を一筋の涙が伝った。もう一度行きたい。だが、きっと日本中を探してもあんな場所はないだろう。

なんなんだ、この喪失感。そういえば、最近似たような気持ちになったことがあった。3ヶ月間付き合っていた彼女にフラれた時だ。胸にぼっかり穴が開く、まさにそれだった。

起きて五分ほど経ち、夢の内容は段々とうろ覚えになってきたが、この喪失感はいつまで経っても消える気配がなかった。

…二度寝しようか。寝返りをうって壁にかけてある時計に目をやると針は6時50分を指していた。

——まずい。

7時30分に家を出なくては学校に遅刻してしまう。今の時間は朝食を食べて準備をしてゆったりと学校に行ける時間だが、二度寝するまでの時間はない。

今日は期末テストの最終日だ。二度寝なんかで遅刻した日には両親や担任から何を言われるか分かったもんじゃない。元々自慢出来

るような成績をとったことなんぞないが、だからといってテストをサボるほど落ちぶれてる訳でもない。

仕方なしに布団を蹴り飛ばし、寝間着のジャージから半袖のYシャツと灰色のズボンに着替えて一階のリビングへと移動する。

朝食を摂っている親父に軽く挨拶し、自分も席についた。母さんはいつも通り既に朝食を済ませて弁当におかずを詰めている。

「慎吾、最近彼女とはどうなんだ？」

親父は朝の定番となった質問を今日も口にする。

最近も何も、俺に彼女が出来たと知ってから毎日飽きもせず訊いてくる。だから、俺も毎日変わらず同じ言葉を返す。

「別に、いつも通り普通だよ。」

別れたことは、なんとなく言わないことにした。

朝から空気を重たくする必要もないし。親父が別れたことを察するまで黙っておこうと思う。

それから特に会話もせず、先に席を立った父に「いつてらっしゃい」と声をかける。一人になったテーブルで、考えることはやはり今朝の夢のことだった。

異世界

そこはドーム状の建物だった。広さ、大きさは目測で東京ドームの二倍ほどで照明のようなものは一切見当たらないのに紫がかった大人っぽい、それでいて暖かな光が建物全体に差し込んでいた。

形こそ東京ドームだったが、そこはどうやら野球やサッカーをするための場所ではないようだった。観客席はあるものの、普通なら一面に芝生が敷いてある場所にはサーカスに使うようなボールや梯子、ロープ、ネットなどが積んであったり、今にもオーケストラが入場してきて演奏を始めてもおかしくないくらいの楽器が並んであったり、中央には50mプールまであったりした。

俺にはその光景がとても幻想的に見えた。プールには紫の光が反射して、楽器やサーカスの道具は影を帯びながらも堂々とその存在感を表している。誰一人居ないここで立っていると、開演前日の舞台に一人で立っているような感覚だった。

中央のプールの前でただ突っ立っていると、いきなり眼前に女の子が現れた。夢だからだろうか、俺は別段驚いた風でもなく、脳裏に浮かんだおそろくはその少女の名前であろっ単語を口にする。

「……………由紀。」

呼ばれた少女は嬉しそうにプールの周りを踊りながら鼻歌を歌い始める。建物の雰囲気と重なって、まるで舞台でも見ているような気分になった。

しばらくそうしていた彼女は再び俺に近づくとその薄く、ほんの

りとしたピンク色の唇から言葉を発する。

「・てる・じゃ・・て、いつ・・にま・・だよ？」

……………何と言っていたらうか、思い出せない。確か、ここで目を覚ましたのだ。わりと覚えていた自分に感心しつつ、さらにその少女の言葉を思い出そうとする。が、出てこない。建物の様子とか、プールの水面の波の打ち方まで記憶に残っていたというのに、どういう訳かその少女のことだけは美しかった、という印象だけしか残らなかった。

それでなおさら、夢のことが気になった。あれだけ美しいと思っただ少女の顔を忘れたのだ。いくら夢の出来事といっても何か損をした気持ちになる。出来ることなら夢の続きを見たいな、と小学生のようなことを考える自分に小さく笑う。

———そういえば、と思い出したように時計を見ると7時41分と針がさしていた。……………遅刻かどうかぎりぎりなラインだ。最初の10分はHRホームルームになっっているとしても、遅刻を三回してしまうと一回の欠席扱いになる。既に一学期だけで14回遅刻してしまう俺にとってこれはマズイ。一学期はせめて4回の欠席で済ませたいと思っていた俺は、とつと二階にある自分の部屋に戻って中身がほぼ空の鞆を持って、足早に家を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5294ba/>

夢路の果てで

2012年1月14日19時51分発行